

芥川龍之介『奇怪な再会』論：日清戦争を背景にした中日の表象

戴, 煥
中国人民大学

<https://doi.org/10.15017/16057>

出版情報：Comparatio. 11, pp.28-35, 2007-11-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



芥川龍之介『奇怪な再会』論

——日清戦争を背景にした中日の表象

戴 煥

はじめに

『奇怪な再会』（大阪毎日新聞夕刊）一九二一年一月五日）は、芥川自身が「怪しげな小説」（小沢碧童宛て一九二一年一月六日）、「変な小説」（小穴隆一宛て同日）と認めた中編である。日清戦争直後、中国の威海衛の妓館から、ある日本帝国軍人に東京に連れ出された中国人女性・お蓮が、過去に親しんでいた中国人男性との再会を強く希い、ついに狂気の中で願いがかなうという怪談じみた物語であるが、その舞台が、本所に設定されたことには、非常に興味深いものがある。芥川は、後年の『本所両国』（『東京日々新聞』昭和二年五月六日〜二十一日）で、お蓮が住んだ「御蔵橋の川に臨んだ」「お竹倉一帯」（四頁）について、こう語っている、

「お竹倉」は僕の中学時代にもう両国停車場や陸軍被服廠（ひふくしやう）に変つてしまつた。しかし僕の小学時代にはまだ「大

溝」に囲まれた、雑木林や竹藪の多い封建時代の「お竹倉」だつた。

…（中略）…

以前の「お竹倉」は夜は「本所の七不思議」を思ひ出さずにはゐられない程もの寂しかつたのに違ひない。夜は？——いや、昼間さへ僕は「お竹倉」の中を歩きながら、「おいてけ堀」や「片葉の苔」は何処かこのあたりにあるものと信じない訣には行かなかつた。現に夜学に通ふ途中、「お竹倉」の向うに莫迦囃しを聞き、てつきりあれは「狸囃し」に違ひないと思つたことを覚えてゐる。それはおそらくは小学時代の僕一人の恐怖ではなかつたのであらう。なんでも総武鉄道の工事中にそこへ通つてゐた線路工夫の一人は宵闇の中に幽霊を見、気絶してしまつたとかいふことだつた。（十一〜十二頁）

ここで語られた怪しげな昔の「お竹倉」は、確かに怪談小説の舞台として格好な場所であらう。実際、『奇怪な再会』は、後に『開化の殺人』『妙な話』等とともに『日本探偵小説全集』（改造社、昭和四年六月）に収録され、怪奇小説として読まれていたのである。

しかし、注意したいのは、小説の舞台である本所が芥川の生まれ育つた地であり、『本所両国』において、工業化された本所について「金銭を武器にする修羅界の空気を憂鬱に感じるばかりだつた」と、近代の問題を提起し、懐かしさ満ちあふれる口調で過去の本所を語っている点である。工業化以前の本所を舞台に展開された『奇怪な再会』には、「開化物」の陰画」としての要素が秘められていると思われる。

『奇怪な再会』については、お蓮がその抹消された中国人としてのアイデンティティーを取り戻すことと、発狂することが同時進行していることを、アイデンティティーの危機と狂気という芥川自身のテーマに結びつける論や、「昔の恋人の思い出を引きずりながら火鉢の前で今の夫を待つお蓮の姿は『秋』『中央公論』一九二〇年四月の信子に通じる」、あるいは、「女性の中に眠れる野性の自覚」から、『母』『中央公論』一九二一年九月が連想される、等といった女性像系譜からの検討も見られる^三。また、「幻想の中で思ひの人との邂逅を成就する女性と、背後にある残酷な真実とは、中国趣味とともに『南京の基督』を彷彿させる」という指摘や、「開化」が抱えた闇を男女の陰惨なドラマに仕上げた一種の「開化もの」とし、「そこには帝国の暗鬱も写されている」^四という論点も提示されている。

創作時期から見ると、一九二〇年というのは、大阪毎日新聞社入社後の中国旅行計画が二度とも計画倒れに終わったのを受け、芥川は盛んに漢詩を作り、真剣に中国旅行を考えていた^五時期であった。『奇怪な再会』のヒロインを日清戦争時代の中国女性に設定したのは、けっして偶然ではなく、その前に発表されたやはり中国人女性をヒロインにした『南京の基督』（中央公論一九二〇年七月）と同様、中国の現状を自らの目で確認することを意識しながら創作したものであり、中国旅行のための精神的な準備にあたるものとして考えて差支えないだろう。

本稿では、懐旧の情を呼び起こす前近代的な場所に中国人女性が連れ込まれ、そこで一連の精神的ドラマが展開されるという『奇怪な再会』を分析して、その前近代への郷愁と同時代の「中国」像との関連

に焦点を当てることで、「近代」日本と中国との関係についての芥川の認識に迫ってみたい。

(一)

『奇怪な再会』は、お蓮が牧野と同棲したところから始まっている。お蓮は、「旦那が来ない夜などは寂しすぎる事も度々あった」一方、「他国に流れてきた彼女自身の便りなさ」を感じて、牧野に対して「不意に妙な憎悪の念を燃え立たせる事も時々あった」と、小説は最初の部分でお蓮の揺れる気持ちを語っている。戦争で自国を負かした国の軍人と一緒に敵国へ渡り、同地の人間に仮装して妾を勤めるお蓮は、いったい自らの境遇をどう考えているのだろうか。

二章では、お蓮は、牧野の妻に対して、「同情は勿論、憎悪も嫉妬も感じなく」、「多少の好奇心」ばかり持っているというふうに、むしろ、現在の境遇に甘んじている様子である。日本髪を結ったお蓮は、牧野と連れ立って寄席の人ごみの中で、自国が敗れた日清戦争の幻灯を見る。語り手は、「熱心に幕へ目をやった儘」、牧野の話しかけにうなずいたお蓮について、「それは勿論どんな画でも、幻灯が珍しい彼女にとって、興味があつたのに違いなかつた」と説明する。それから「しかしその外にも画面の景色は雪の積もった城楼の屋根だの、枯柳に繋いだ兎馬だの、辮髪を垂れた支那兵だのは、特に彼女を動かすべき理由も持っていたのだ」と、近代国家間の戦争という重い意味をまったく意識せずに画面を見つめているお蓮の姿を浮かび上がらせている。つまり、

お蓮は近代的な「戦争」の枠組みの外にある人間なのである。

物語が進展するにつれてわかることであるが、お蓮が娼婦になったのは、継母との対立によって自ら進んで身を売った結果なのである。また、日本に渡ってきた時、「着物どころか、櫛簪までも、ちゃんと持参になっている」というぐらいの余裕があったことから、おそらく渡日も自らの意志で選んだ道だったと推測できる。お蓮は、自らの行為を「あきらめがいい」と説明するが、けつして何もかもあきらめているわけではない。過去に親しんでいた男性のことには、むしろ身を焦がすほど強く執着している。つまり、お蓮はけつして主体性のないかわい女性として描かれているわけではないのである。戦略としての従順さの下に、「押し隠していた」、「荒む儘に任せた野性」を持つていると、明確に語られている。理性の対極にある「野性」こそが、お蓮の行動論理をなしている。「邪慳」な継母に抵抗するために身を売ることも辞さず、遙々敵国に渡って平然と妾を勤めている。「野性」によって行動するお蓮は、近代の合理的な考えから一線を画した存在である。

だが、生存本能に近いはずのお蓮のこの「野性」は、けつして自己中心的なものではなく、他人に対して献身的な性質をそなえている。妾の身でありながら旦那に本妻を捨てないように本気で頼み、別れていた男が殺されるのを許そうとはしない。つまり、お蓮の生きる感覚は、功利的な利害関係を超えているのである。例えば、お蓮と過去の男である金とは、「深い馴染み」であるが、金にはお蓮を娼婦の境遇から救い出す力はない。お蓮が金のことを気にかけるのは、「恋しい」というより、金が突然別れを告げずに姿を消したためである。彼女は、金は「二人の間柄」を裏切りはしないだろうと信じ、その安否を懸念し、再会を

願う。しかし金は、妓館に通い、「悠々と鴉片を燻らせ」るような男である。お蓮が金のことを心配するのは、自分の境遇を改善するといった功利的な動機からではないのである。

要するに、お蓮は、合理的功利的な行動論理とは一線を画した、自分なりの論理を持つて生きている女性に造型されているのである。

このようなお蓮は、『お富の貞操』のお富を想起させる。お富は、なぜ大事なはずの貞操を投げ出そうとしたのか。千石氏が次のように分析をしている。

お富の行為は、猫の犠牲の上に成り立つ自分の存在を絶対に肯定できない、その精神と肉体の身動きである。猫のためでも、主人のためでもない。彼女を行為へと強く促したのは、彼女のまさに根底をなしている彼女自身の生きる感覚である。そこから彼女の生きるスタイルが流れ出てくる。…(中略)…彼女が護つたのは、結局それだ。自身の生きるスタイル(生き方)が貞操より大事だと、彼女の生きる感覚(スタイル)がお富を行為へと飛躍させた。だから、彼女の行為はなにものかへの自己犠牲ではなく、はつきりとした自己主張である。^六

お蓮が自ら進んで身を売ったのも、敵国の軍人について他国に來たのも、過去に親しんでいた男の安否を懸念するのも、まさにお富と同じように彼女自身の生きる感覚による行動であり、一種の自己主張である。それは、国民国家や恋愛などといった近代的な理念の枠の外にあるもので、どこか近代以前の雰囲気漂わせるものである。

『奇怪な再会』は、お蓮が、金のことを懸念して再会を願い、ついに発狂して金との再会を実現するという物語であるが、それは、日本人に仮装したお蓮が自らのアイデンティティーを取り戻す物語とも読み取れる。発狂したお蓮が犬を抱いて金だと錯覚し、中国服を脱ごうとしない場面からは、彼女が狂気の中で金との再会を果たし、中国人としてのアイデンティティーを回復していることがわかる。金との再会に執着することは、抹消されたアイデンティティーに執着することを意味しているのである。金が抹殺されたことを許せないのは、自分の過去、自分のアイデンティティーが抹消されることを許せないからである。

「あきらめがいい」古風なお蓮であるが、自己のアイデンティティーについては、どうしても譲ることができないのである。

(二)

男性主人公の陸軍軍人牧野は、近代化が加速していく日清戦争後の日本社会で、軍人からいち早く御用商人に転身して成功した、時代の潮流にうまく棹差す功利的合理精神の持ち主である。彼はまた、見初めた女を手に入れるためには人殺しも辞さず、邪魔だと思えば犬でも見逃してはおかないという、目的を達するためには手段を選ばない自己中心的な人間でもある。そして、このような人間が、「人知れない苦勞」をしてお蓮を日本に連れてきたのである。牧野がお蓮を日本に連れてきた経緯について、語り手は当事者以外の登場人物の口を借りてしか語らないが、牧野の手助けをした同僚の田宮が自分では同

様の行動を取らなかったことなどから、中国人女性を日本に連れてくることにはある程度のリスクが伴ったことが推測される。では、なぜ牧野がそこまで苦勞してお蓮を連れてくる必要があったのか。言い換えれば、お蓮は、牧野にとつてどういう価値を有する女性だったのか。

牧野がお蓮を住ませたのは、「本所の横網」の「御蔵橋」の川に臨んだところである。『本所両国』では、「明治二三十年代の本所は今日のやうな工業地ではない。江戸二百年の文明に疲れた生活上の落伍者が比較的大勢住んでゐた町である」と、本所の性質が規定されている。つまり、日清戦争後のこの辺は、近代文明におかされていない、「封建的な」名残が残った地であった。「御蔵橋」近辺については、次の記述が見当たる。

僕は昔この辺にあつた「御蔵橋」と言ふ橋を渡り、度々友綱の家の側にあつた或友達の家へ遊びに行つた。(中略)そこは僕の住んでゐた元町通りに比べると、はるかに人通りも少なければ「しもた家」も殆ど門並みだつた。(十三頁〜十四頁)

つまり、お蓮が住んだ「御蔵橋」近くは、本所の中でも特に寂しく、近代的な都市開発に縁の遠い町である。実際、お蓮と牧野が「近所」の寄席から帰る途中の通りも、「しまった家ばかり続いている、人氣のない町」と描かれている。牧野は、このような近代的な雰囲気のない町にお蓮と住み、江戸の名残のある「寄席」を楽しんだりしたのである。

それに対し、牧野の「本宅」は、「厩橋」に設定されている。「厩橋」は、

一八七四年（明治七年）十月六日に完成された木橋であり、老朽化のために東京府によって鉄橋に架け替えられ、一八九三年（明治二十六年）五月六日に完成している。この厩橋鉄橋の建設に伴い、現在の春日通りが一八九五年（明治二十八年）に開通している。物語の設定上、本宅は妾宅からあまり遠くない場所に位置する必要があるが、「厩橋」は、横網の近くにありながら、開通したばかりの大通りのすぐ近くに位置し、御蔵橋近辺の「妾宅」とは一味違った新興開発地であった。

このような「本宅」にいる牧野の妻は、「眼鏡をかけ」ていることで象徴されるように、近代的な知的な女性であり、しかも妾のことで夫に殴りかかるような自己主張の強い人間である。また、妾宅の場所がわかったらすぐにでも「押しかけてこないものじゃない」といった、自分の利益を守るためにできるかぎりの手を打つような女性で、従順で献身的なお蓮とは対照を成している。牧野は、近代的な場所にある「本宅」の妻よりも、封建的な土地に住む古風なお蓮をかわいがっている。近代化していく日本社会で功利的に動いている牧野にとって、お蓮は、「好縹緲」の容貌のみならず、彼の江戸趣味を満足させる要素を備えており、古い時代の安らかな空気を吸わせてくれる存在なのである。

牧野がお蓮を連れて寄席で幻灯を見る場面は、非常に象徴的である。小説に出てくる日清戦争の幻灯の場面は二つある。一つは、「定遠」艦沈没の場面で、日本が、かつての強国「清国」を打ち破るさまを象徴し、もう一つは、樋口大尉が雪の中で中国人の捨て子の赤子を懷に入れて戦う場面で、戦争相手国の弱きものを憐れむ日本軍人のイメージを宣伝するものである。二つの幻灯が織り成す物語は、まさに牧野が中国人の金を殺して、その親しんでいた女性を手に入れてかわ

いがる様相と象徴的に呼応している。「悠々と鴉片を煙らせる」金は、衰弱していく清国の象徴であり、彼が闇討ちで殺されたことは、戦争の暴力性を暗示している。牧野に可愛がられたお蓮が最終的に破滅していくプロットは、まさに樋口大尉の人道的なイメージの背後に潜んだ暴力性を暴いている。さらに興味深いのは、戦争の勝利者を象徴する牧野が、幻灯を見て万歳を叫ぶ観衆に、「戦争もあの通りだと楽なんだが」と異議申し立てをすることである。牧野にとっては、幻灯で表現された「戦争」の背後に、より複雑なものが潜んでいる。金を闇討ちで殺すことで同僚の宮田に嘲られ、奪ってきた女性もけつして思うままにできない。牧野の「勝利」の後に、お蓮を失う幻滅が待っていたのである。

『奇怪な再会』は、牧野の敗北の物語であるとも読み取れる。遙々敵国から勝ち取ってきた女性を身辺に置く平穩な「幸せ」は、まもなく崩壊してしまう。その幸せを脅かしたのは、女性の執念であり、犬の目つきに感じられた何か無形のものであった。牧野がお蓮の飼う犬を「不快」と感じ、「忌々しそうに」思うのは、お蓮を奪おうとする何かを予感したからであろう。しかし、その何かは、暴力では対抗できるものではなかった。実利的な牧野は、自分の古い時代への郷愁を慰めるために中国人女性を奪ってきたのであるが、その望みを叶えることはできなかったのである。

小説は、結末の部分で第三者の口を借りて「牧野も可哀相な男さ。蕙蓮をめかけにしたといっても、帝国軍人の片破れたるものが、戦争後すぐに敵国人を内地へつれこもうと言ふんだから、人知れない苦勞が多かつたろう」と、牧野を哀れんでいる。封建的なものに憧れる近代日

本の男は、暴力で戦争に勝っても、その前近代への郷愁を満たされることはなかったのである。

(二)

先にも触れたが、『奇怪な再会』のプロットは、お蓮と金の再会の実現をめぐる進行するが、それを押し進める力は、お蓮の生の感覚であり、合理的なものでは説明できないアイデンティティーへの執着なのである。では、お蓮の過去やアイデンティティーは、どういうふうに表現されているのだろうか。

お蓮の過去を象徴する金が始めて登場するのは、船室に大勢の旅客と乗りあっているお蓮の夢においてである。この夢はお蓮が日本に渡ってきた当時の心情を反映するものと考えられる。夢の中で、金は、「悲しそうな微笑を浮かべながら、じつと彼女を見下ろしている」。お蓮を引き止めようとはしない、非常に無力な男のイメージである。次に登場するのは、弥勒寺から帰ったお蓮が見る幻においてである。幻の中で金は、「四角な枕へ肘をのせながら悠々と鴉片を燻らせている」。アヘンを吸う退廃的のんきな金には、牧野を相手にお蓮を奪い合う力はない。日清戦争の幻灯を見た晩、お蓮は、「暗い藪だか森の中を歩き回っている」夢を見て、その夢の中で金との再会を期待するが、「戦争」が勃発し、「一人」で「逃げまどう」。彼女は金に助けられたり守られたりすることを期待しはしない。女を守るだけの力のない金が当時の中国を象徴するとすれば、近代的価値観を超越した野性の感覚で「一人」で

生きている蓮は、日本人が郷愁を感じる前近代的精神性を象徴していると考えられる。そして、その精神性は当時の中国に残存していたものなのである。金がお蓮を娼婦の境遇から救い出してやることも、牧野から守ることもできないことで象徴されているように、当時の中国は、すでに伝統的な精神性を受け継ぐだけの力を失いつつあったが、その精神性は、本来の土壌にしか存在の根拠を見出せないものであり、他国に移植されても結局は滅びるしかないものである。

興味深いことに、小説はお蓮が日本に連れてこられた時点からはじまっている。つまり、物語の焦点は、金とお蓮の関係そのものより、日本を象徴する牧野がいかにお蓮と金にかかわったかという点にあると読み取れる。

まず、三人の關係に「戦争」が大きくかかわっている。牧野は、戦争中、金を殺してお蓮を奪い、その後、成功し、「手広い」「妾宅」を持つようになった。つまり、牧野が暴力的な戦争を通して得たのは、経済上の利益と、前近代的な美をそなえたお蓮である、という構図になっているのである。

日本に連れてこられたお蓮は、次第に中国にいる時と様子が変わっていく。九章の、牧野が同僚だった田宮を連れてお蓮を尋ねる場面で、田宮が「お蓮に丸髷が似合うようになると、もう一度昔のなりに、返らせて見たい」と注文すると、牧野も「返らせたかった所が、仕方がないじゃないか」と、お蓮が昔の着物を持っているにもかかわらず、注文通りにしてくれないことをほめかす。つまり、田宮も牧野も、日本に連れてきたお蓮に、中国にいた当時のままの姿でいてほしいと望むのだが、お蓮はそれを拒み続けるのである。小説では、お蓮の幻覚や夢の場面

が頻繁に描かれる。妄想とは、決して他人と分かち合えないもので、人間の個性を示すものである。狂気は本人が自らの世界に閉じこもって他人と交渉を持たない状態である。牧野にとつてお蓮は、その身体を得られても、永遠にその世界に介入できない他者である。精神に異常が起き、次第に衰えていくお蓮に対して、牧野は嘆くことしかできない。牧野にお蓮の他者性を認識させたものは、お蓮をそばに置いておきたいという彼の欲望である。小説の最後で語られるように、牧野もある意味で「可哀相な男」である。実利的で力のある近代的な男でありながら、前近代的な美しさへの欲望のために手段を尽くし、結局満たされることがなかった。

伝統的な美しさを保有する力をすでに失った退廃的な中国に対して、牧野によって象徴される日本は、その美しさを欲望したもの、みずからの他者性のために、ついにそれを享受することはできない。お蓮に象徴される中国の精神性は中国においても日本においても滅びるしかない。

終わりに

『奇怪な再会』は、語り手が、医者である友人Kから聞いたお蓮の話を読者に語るといふ入れ子形式になっている。結末のところで、語り手「私」が、この話をお蓮の悲恋物語として理解してその恋人金の行方を尋ねてみると、友人Kは、彼の理解の仕方を嘲笑し、帝国軍人牧野の暴力性を暴く。お蓮の悲劇は、けつして単純な三角関係の恋愛ではな

く、その背後には帝国軍人牧野の暴力性と欲望が潜んでいる。もちろん、この牧野も、単純な悪玉ではなく、お蓮の美しさを渴望しながらついに享受できなかった「可哀相な男」でもあるのだ。日清戦争を背景に展開された牧野とお蓮の話は、近代日本と中国の複雑な関係を多角的に表象している。牧野の出世は日本の近代化と戦争との暴力的な共謀関係を象徴し、彼のお蓮に対する憧れには、前近代への郷愁が含まれている。一方、無力な金は中国を象徴し、お蓮は中国に残されている近代以前の美しさともろさを象徴している。日本は近代化が進み、戦争で中国を負かしても、やはり中国に残されている前近代的な美しさに対する憧れを禁じえない。しかし、そのような前近代への郷愁はいかなる手段を使っても満たされることが永遠にあり得ない。

芥川が中国旅行を心待ちにしながら書いた『奇怪な再会』は、その少し前に書いた『南京の基督』と同様、中国との関係を意識しながら、日本の近代について考察した小説である。近代日本人は近代化を進める中で、中国を暴力によって征服しようと試みる一方で、中国に残されている前近代的なものに憧れを感じた。しかし、その憧れは、暴力的な手段で叶えようとしても叶えられないのではなく、いずれ幻滅を味わうだけである。これが芥川が『奇怪な再会』で表現したかったことであろう。

注

一 『本所両国』テキストの引用は、すべて『芥川龍之介全集』十

五卷（岩波書店一九九七年一月）による。引用文後括弧内は頁数である。以下同じ。

二 『芥川龍之介新辞典』関口安義編 翰林書房二〇〇三年十二月、一四三頁『奇怪な再会』の項（乾英次郎執筆）。

三 前掲書一四二頁。

四 『芥川龍之介全作品辞典』関口安義編、勉強出版平成十二年六月、一三三頁『奇怪な再会』の項（橋浦洋志執筆）。

五 関口安義『特派員芥川龍之介』毎日新聞社一九九七年二月を参照。

六 千石隆志「芥川龍之介覚書―『お富の貞操』についての考察」清水康次編 『芥川龍之介作品論集成 第4巻 舞踏会―開花期・現代物の世界』翰林書房一九九九年六月、一四四頁。

なお、「奇怪な再会」テキストの引用は、すべて『芥川龍之介全集』第七卷（岩波書店一九九六年五月八日）による。